



現代中国の著名作家 冰心（謝冰心）の自筆完全原稿を発見

九州大学大学院言語文化研究院の中里見敬教授らの研究グループは、九州大学附属図書館濱文庫（※1）に所蔵される『春水』手稿本（原稿）について、現代中国の著名作家・冰心（※2）の自筆原稿であることを、執筆から95年後に確認しました。冰心22才のときに書かれたこの原稿は、現存する冰心手稿の中で最も早い時期の完全原稿で、中国現代文学の第一級の原資料です。

昨年公開された周作人（1885-1967、魯迅の実弟、北京大学教授）の1939年の日記に、『春水』手稿本を濱一衛（1909-1984、はま・かずえ、九大名誉教授）に贈る旨記されていたことから、濱文庫に所蔵される『春水』手稿本の由来が判明しました。また、『春水』出版時に周作人が編集を担当していたことから、この原稿が冰心による自筆原稿であることが確定になりました。

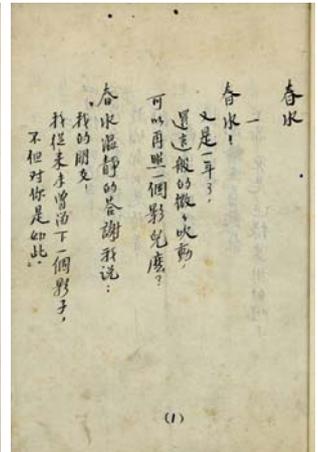
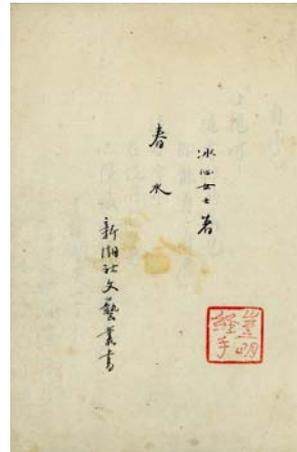
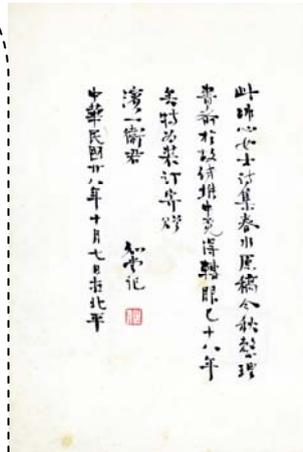
本研究成果は科学研究費補助金の支援を受けたもので、2017年6月20日に北京の中国現代文学館が発行する学術誌『中国現代文学研究叢刊』2017年第6期に掲載されました。

研究者からひとこと：

周作人の日記の一文から、長年の謎が氷解しました。Facebookでの研究者の書き込みから、日記の公開を知ったことがきっかけでした。

本資料は日中文化交流を象徴する貴重なものですが、一方で周作人は、戦争中に日本との関係が深かったことから、戦後は不遇でした。濱一衛は周作人に直接お礼を言えなかったことを終生悔いていたと、ご遺族から聞きました。

新中国で作家協会の幹部になった冰心と、三者三様の戦後の生き様に思いを馳せるとき、感慨は尽きません。



（参考図）

上左：1939年10月7日周作人題記

上中：冰心自筆表紙、「豈明經手」（周作人）印

上右：『春水』手稿本，1ページ

左：冰心（1920年代）

【用語解説】

（※1）故濱一衛・九州大学名誉教授が蒐集した中国演劇関係の和漢書939点（約2500冊）で、戯単（芝居番付）、唱本（歌詞の小冊子）、新聞切り抜き、レコード、写真等も含む特色あるコレクション。

（※2）冰心（1900-1999、ひょうしん、中国語音はピンシン、日本では謝冰心とも）は燕京大学在学中に、詩集『繁星』（1922）および『春水』（1923）、小説・散文集『超人』（1923）等を発表し、新文学を代表する作家となった。現在に至るまで、小・中学校の国語教科書に採用されており、中国では子供から大人まで誰もが知る国民的作家。

【お問い合わせ】言語文化研究院 教授 中里見 敬(なかざとみ さとし)

Mail: naka@fkc.kyushu-u.ac.jp 電話: 092-802-5730 携帯: 050-5237-9423 (メール推奨)

【資料の閲覧等について】附属図書館資料サービス係 Mail: tousiryou@jimu.kyushu-u.ac.jp 電話: 092-642-2337

【資料の掲載について】附属図書館文献流通サービス係 Mail: toubunken@jimu.kyushu-u.ac.jp 電話: 092-642-2334